

環境事始 十八帖 日野川戦争

横浜国立大学 名誉教授 加藤 龍夫

鉄砲は使わなくても戦争、国内戦と思っている。鳥取県日野川に製薬工場が来るので環境汚染を心配して反対運動が起きていた。攻撃側は当の藤本製薬と県と溝口町、そして野村総研。守備側は流域市町村と流域の住民の誘致反対同盟で中心は近藤久子婦人会長、岩田武彦境工高教諭。四つに組んで9年決着付かず、県が三千六百万円で野村證券の研究所にアセスを依頼したのでSOSが来た次第。先生は直ぐに承知して作戦を立てた。予め廟算するに算多きは勝ち算少なきは負ける。敵は本気だから先ず味方戦力に魚類生態学の富山大田中晋教授、水質分析化学の千葉大中川良三教授を配した。環境調査は春夏秋冬つまり一年を要するのが原則。そして何よりも下流の岸本町が環境研に百万円の予算で調査依頼を組むように図った。これは相手の県が私企業に依頼したのに対し、町が国立機関に依頼する大義名分の錦の御旗を持つためである。費用は3600対100で充分、こちらは利益捻出の必要がない。調査は完全環境調査、即ち地域の地質、気候の地理条件と古代からの歴史、経済、近年の政治条件から始めて、水質、水量、薬品、毒性、水生昆虫、魚類、山椒魚凡て網羅した。以下は特筆する点である。汚染に敏感な水生動物は蜉蝣類、これは月一度住民十数名が自分たちで水に入って採取し、実態顕微鏡を与えて計測した。新種発見など専門研究ではなく、ポピュラーな種類分けなら素人でも習えば可能である。結果この川はまれに見る清流であると証明した。汚染は水量に左右されるが、その正確な把握はされてない。一年毎日橋の上から写真記録し、補正表を作って算定した。年数回の大水の他は最低水位が多く、平均値では汚染の判定は不可能な事実が分った。特に酷い渇水期には一滴の毒物も致命的の被害を与える。流域には8km毎町があり、生活排水は1kmまで残るがその先は浄化されていた。多摩川など累積される場合と異なる。日野川の河口、日江津村に製紙工場があって唯一の汚染源となっていた。この排水は塩素化ベンゾフランを含み、このため畸形の鮎が見られ、調査ではその貴重な資料も記載した。上流の処女川での環境破壊は一工場が原因となり得ることを示す。無傷の環境で人為汚染の被害が深刻となる機作は次のように考えてよい。生態が豊かというのは苔が豊富、微生物、水生昆虫など多量だから、汚染物質は直ぐ下流で高濃度に蓄積される。生体濃縮の危険性が高いのである。汚染が洗われて希釈拡散する期待は田舎では通用しない。僅か三薬物の処理方法など実験しても、多種多様の薬品を扱い、かつ十年で製品が変わる製薬工場の廃水対策で人の説得は不可能である。町も住民も君子危うきに近寄らずの態度を貫いたのは正しい判断だった。横国大と野村総研の報告が出揃った時点で、劇的な結末を迎える。住民会議のメンバーが抗議に行った席上で県が突然断念の発表をしたのである。新聞は「住民パワー押し切る」と報道した。その後勢いに乗って、戦後長年画策されてきた中海淡水化事業を中断に追い込んだ。その巨大な水門は自然破壊暴力の記念碑として錆び朽ちるまま放置された。環境を守った事業としては、こちらの方が遙かに重要だったのはいうまでもない。中心的役を果たした近藤女史は直下型鳥取大地震のショックで記憶喪失になり間もなく病死、岩田先生は膀胱癌が移転して亡くなった。そして清流日野川は今も秀峰大山の影を映して流れている。

